真っ白なノート　五葉松

キンモクセイをふと見たら小鳥の巣があった。
小さな命の営みを大事にしようと思った。
この心音という小さな冊子、君に出逢い、君と別れ、その時々に、聞いた自分の心音、恥ずかしくもあり、希望にも満ち、歩んだ数年を次の詩集として、君に送りたい

目次

木立
数学
雨が怒って
旅
真っ白なノート
２０年の歳月
恥じらい
君
母
灯り
行く年来る年

木立

冬　白一面
そんな日が好き
不思議である。
瀬戸内生まれには
白き雪が。

僕の心に
君がいる
君が去ろうと
僕の心に
君がいる

喜びが
きみともに
去っていった感じ
ああ、又巡り会いたい
心の通う人

朝起きて
ぼやあーとする
何か、集中しない
君が去って

いったからか

今日は、
心が弾む
仕事ができた
恋ができた。
うれしさ一杯

美しい画面
それは我らを
陶酔させる
一枚一枚
貼り付ける楽しさ

それは、君が
丁寧に
化粧する様
いや
身繕いする様

嗚呼、花の衣を
脱ぎ、葉を装い
そして、また
錦にして脱ぐ

季節は巡り

やがて冬
裸のまま
たたずみ眠る
雪が舞い
雪をまとう

君の名は
木立
じっとたたずみ
春の訪れを感じ
つぼみを育む

今日をまつ町
明るく照らす
笑顔見たくて
雪町に行きたい
君を求めて

数学

台風一過
夕焼け雲と
青い空の
コントラストに
魅了される

そして散歩へ
空を眺めながら
西に向かう
反転の一般式が
頭をよぎる

そろそろ
引き返す場所
当たりはもう暗い
信号の青と赤が
球のように浮かぶ

まだ、一般式を
考えている
３乗数４乗数
限りなく
空間が広がる

可愛い子が
現れ
思わず
好き好き好きで大好きでを
口ずさむ

楽しい散歩
ここで、電話
何を想っていたのか
明日は、天気だろう
虫の音が涼しい

太陽の沈む頃
宿に着いた
この日の疲れが
今夜のまどろみで
明日の希望へと変わった。

雨が怒って

雨の暗き庭
　君の顔が笑う
　　ああ七変化
　　楽しさを超え
　うつむく自分

明るい太陽
やがてくるあけぼの
橙色の中の黄金
空から山から
心に咲いた夢

雨が怒って
傘をたたいた
パチパチパチ
心がキューと
痛んだ

海猫が舞う
帰らぬ日々
夏の怒濤の
日御碕灯台
君と佇む

夢が覚め
振り返れば
もう何もない
誰もいない
一筋の雲が流れている

生きている
そこに、
大きな野望
今は、だだ
沈黙するだけ

旅

飛べ
勇気を持って
空は高く
海は青く
異国の地へ

明るい人
暗い人
もう
帰れない
男女の絆

傘を差す
手元が
いとおしい
二人でぬれた
長い道

笑え
不細工なら
泣け
怖いなら
君は自由な人

指の運動
明るい画面
悲しさが
伝わらない
ハイテク・メール

心
うきうき
春が過ぎ
明るいビーチ
夏の海

人々の
やさしさに
われ
戸惑いて
歌う

楽しみと
悲しみが
瞬時をかける
明日は誕生日
一人旅

真っ白なノート

季節は巡り
心の傷が
また痛む
愛をなくし、
愛に飢えた

山が呼んでいる。
青い空、
流れる白い雲
今日も汗をかき
一歩一歩

あれから
何年もたった
というのに
あのときの巡り会い
今も、忘れられない

今日から、
新学期、
心が躍った、
あの日その日
真っ白なノート

４０年の歳月

よい子
悪い子
誰がいう
大人はみんな
二丁面

楽しさ
ただ寂しさ
いつまでも
忘れられない
４０年の歳月

あなたという人
君という人
みんな
僕の心の奥で
笑っている僕に

ああ
今日は歌会
揺れる帰りの
歌心
湧いてくる思い

揶揄
いやみ
皮肉
みんなみんな
恨みっこなしよ

愛した
愛する
愛し合う
みんな手から
こぼれる水

貝掘り
アサリ
シジミ
いや蛤
ああ、足がしびれる

恥じらい

進め
止れ
いや
歩め
恋路

乙女の
恥じらい
いや赤面
老いた私も
耳が赤い

人々の
明るい顔
それがみたくて
やってきた
淋しい町から

雨が降り
相合い傘が
気にかかる
二人はずっと

平行線

君

ずぼん
ドレス
それとも
もんぺ
みんな似合う君

自己宣伝
今日少し
明日はもっと
みんなに伝えたい
この歌を

お尻が
くっつく
満員電車
ああ後ろに
誰がいるのか

マスクと眼帯
眼やみ女に
風邪引き男
そんな昔が
なつかしい

荷物だな
忘れ物一つ
ああ　これ
どこまで
行くのか

夢と絶望
2 つ並んで
座る
夜汽車は、
走る

話だけ
肩の温もりだけ
そんな君がかわいい
子猫のように
じゃれはしないが

頭から
足の先まで
合格
そんな女に
なかなか出会わない

窓ガラス
明るい車内
暗い外
窓に映る
可愛い子

母

山川海
みんな幸せ
きれいにしよう
自然の
めぐみ

カレー
3 人前
玉ねぎ切って
4 人前
もうできたかねえ

頭の中で
ごちそうを
食べている
ルート２は、
おいしい

疲れても
疲れても
ある仕事
野菜くず
埋める穴

雲海の上
青き空
佇む山頂
のどを潤す
一杯の水

歓声に
ゆれる白球
目にしみる
涙涙の
大逆転

灯り

裸がみたい
ああ
かくしている
壁の向こうにいる
君がみたい

銭湯に行った帰り
キリンレモンを買う
ああ、ぼくが、
わざと
消さずにいた灯り

明るさ
楽しさ
ほがらかさ
みんなみんな
笑みをいただく

春、笑い,
秋、寂しい
情熱を持っていた
あの夏が恋しい
枯れ葉の音を聞く今は冬

行く年来る年

顔に顔に
ゆく年
笑み笑い
にやりにんまり
にっこりと

春の嵐
失った青春
よみがえる
夢と愛
再び町へ

行く年の
思いを込めた
書き物を
焼いて
来る年を待つ

アップ
ダウン
行く年
来る年
アップ

花が咲いた
夢が見えた
行く年
多くのひとが
心の星座に

君と会った
うれしかった
時が流れた
再会できた
未来の僕の星

浜辺
自分の足跡をみて
寂しさが消えた
波と遊び
君がよみがえった

飛んだ空で
若い娘に
話しかけた
笑ってくれた
ああ老いた少年

飯がきた
海の家
浜辺を眺め
一人で思索
至福の時

小春日に
思い出す
クリームグリーン
木漏れ日の日々
ブナ林

行く年も
仕事は、7分
残る仕事が
楽しみ5分
十二分な年

窓ガラス
明るい車内
にぎやかな
乙女たち
嫌みが１つもない

朝時計が
チクタク
デンデン
間違いなく
時が流れている

何が大切か
自分が正しいと思うことか、
自分が間違っていると思うことか、
自問自答しながら
生きて行く以外にない。

あとがき

愛があるから巡り会える再び
そして、我々は、明るい新学期を迎える。
甲子園の優勝戦の逆転満塁ホームラン、
今年も、ドラマがあり、ドラマが終わる。
後半、9 月から、新学期、あるいは、新学年
世界は今、明るい話題を求めている。
そう希望という名の物語、
それが、この真っ白なノート、
新しい出会いを求める若い君に捧げる

五葉松

発行日　2007/8/23
発行　卵形線研究センター
著者　五葉松
発行者　蛭子井博孝
発行所　740-0012　岩国市元町４丁目 12-10